

## 上郡町の偉人

## 大鳥圭介

## 「鵬程万里」第七回

著者 中川由香

類は友を呼ぶ。友人を見てその人を知れと言われ  
ます。圭介の友人を見ると圭介の人となり分かる  
でしょう。圭介の生涯の親友として、榎本武揚、荒井  
郁之助、そして宇都宮三郎の三名が挙げられます。

榎本武揚は、圭介が箱館戦争でその下で戦った総  
裁として有名です。長崎海軍伝習所で航海術を取  
得し、圭介と共に江戸で英語をジョン万次郎から学  
びました。その後、オランダに留学。国際法、造船や  
軍事を学び、軍艦「開陽」と共に戊辰戦争前に帰国  
しました。明治政府では開拓使として北海道開発に  
携わり、その有能さでお雇い外国人に畏怖されまし  
た。榎本が始めた幌内炭鉱調査を、欧米産業調査か  
ら帰国した圭介が引き継ぎ、詳細な事業化調査を実  
施しました。その後榎本は、駐露特命全権公使、逓  
信、文部、外務、農商務など各大臣を歴任する政府  
の要職にあり、子爵を叙爵されました。圭介と共に、  
東京地学協会など学術団体で科学を振興し、同方  
会、碧血会、保晃会など旧幕府の団体で、明治で活躍  
する旧幕臣の中心的存在となっていました。榎本は  
好奇心旺盛で洒落っ気がありました。隕石から刀を  
作ったり、牢の中で石鹼や卵の孵化器を考案して親  
戚に事業を勧めたりで、「最もよき意味のハイカラな  
り」と圭介は評しました。榎本が函館付近の砂鉄を  
溶解し鑄造した鉄瓶を、圭介は晩年国府津で使用し

ていました。明治を通し共に国を支え続けた二人の  
連帯感、この上ないものがありました。圭介は榎  
本を「一心団体ともいえる関係」と述べています。

荒井郁之助は、数学、気象、測量のエキスパート  
です。軍艦操練所頭取など海軍畑の士官でしたが、  
陸軍に移籍となりました。その際、横浜で圭介と共  
にフランス人から陸軍教練を受けました。この時同  
室で、昼は軍事訓練、夜は夜中まで圭介がフランス  
兵法書を口述訳し、荒井が筆記。翌日それを他の士  
官に配る。怠ける時間は皆無だったと圭介は回想し  
ています。箱館戦争では、陸軍奉行の圭介と並んだ  
立場の海軍奉行でした。開拓使では物産課に属し、  
圭介やお雇い外国人地質技師のライマンと共に炭  
鉱調査を行いました。ライマンは層雲峡の奥深くの  
未踏の地の川の名に、大鳥川、荒井川と名づけてい  
ます。また、荒井は日本初の工業専門雑誌である  
「中外工業新報」を圭介と共に発刊し運営しまし  
た。「タイプライターの説」「回光器」「米国測量記事」  
などを執筆しています。その後、内務省地理局測量  
課長や中央気象台台長を務めました。圭介は荒井を  
「函館以来死生を共にしてきた刎頸の友」と述べて  
います。

宇都宮三郎は生粋の化学技術者で、化学という言  
葉を最初に用いた人です。日本初の金属の定量分析

を行いました。圭介の若い頃からの洋学者仲間、  
陸軍所などで同僚でした。圭介が脱走し新政府軍と  
北海道で戦っている時に、三郎は病の身で駕籠に乗  
り、江戸から京都まで圭介達の箱館政府を認めるよ  
う新政府に嘆願に行きました。圭介が牢から釈放さ  
れ産業視察に欧州に赴いた時、英国で再会しまし  
た。一ヶ月半で百数十箇所もの工場巡りを共にし、  
明日の日本への導入を共に志しました。工部省で  
は、圭介の官営工場経営の右腕でした。内国勸業博  
覧会で圭介と共に化学部門の審査部長を務めたり、  
地方と東京の技術交流会である万年会を共に率い  
たりと、圭介と殖産興業の現場の最前線で共に技術  
導入を行いました。砂糖や藍の製法、木材の防腐法、  
石油の蒸留器の製作など、圭介が技術を調べ三郎が  
実用化した分野も多いです。一方、パンと水だけで  
二年も生活したり、死後自分の考案した遺体保存棺  
で実験させたりと、数々のユニークなエピソードを  
持ちます。「日本で西洋の理化学を導入して工業の  
先端を開き、その嚆矢を射て率先して文明を教導し  
たのは、他でもない、我が親友宇都宮三郎だ」「人間  
の百事のこれを言うのは易い、これを行うのは難し  
い。百難を排して日本国の工業の愛児を生産したの  
は実に三郎だ」と圭介は三郎を称えています。

以上のように、圭介の友人達と圭介は、好奇心旺盛  
盛かつ合理的で、科学技術に卓越し多分野の第一人  
者であり、多くの人から必要とされ社会に尽くした  
点で似た者同士でした。政治の舞台で焦点が当てら  
れなくとも、圭介が彼らと共に切り開いた土台が今  
の日本の柱になっていることは疑いありません。